

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520575

研究課題名（和文）「朝鮮出兵」の記憶と記録化に関する基礎的研究

研究課題名（英文） The research for the memory and recording about the invasion of Korean peninsula by TOYOTOMI HIDEYOSHI

研究代表者

中野 等 (NAKANO HITOSHI)

九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授

研究者番号：10301350

研究成果の概要（和文）：

本研究は朝鮮出兵をめぐる広義の戦史また後世の歴史認識について追究したものである。まず、情報・風聞論の素材として「朝鮮出兵」の位置づけをおこない、また近世思想史における「朝鮮出兵」理解、あるいは「朝鮮観」の整理をおこなった。その中で、「朝鮮征伐」観の日本における定着の観点からとくに大きな役割を果たした山鹿素行についてモノグラフを完成させ。さらに、近代への展望をうるため、近世後期の諸思潮とその社会的影響について明らかにしている。

研究成果の概要（英文）：

I investigated how the invasion of Korean peninsula by TOYOTOMI HIDEYOSHI has been recalled in the field of war history. My findings are the following; First, I analyzed how people back in Japan talked about this invasion. Second, I surveyed how the intellectuals viewed the invasion and thought about Korea during Edo period. Third, among them I noticed a Confucian YAMAGA SKOH who regarded the invasion as the sacred war, and wrote a monograph on his thought. Four, to get the view how the Japanese modern people think about this invasion, I researched the trend of recognition of the invasion and those social influence.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史学

キーワード：豊臣政権 日朝（日韓）関係史 歴史認識 文禄・慶長の役

1. 研究開始当初の背景

日本が対朝鮮・中国意識を形成していく前提として、「朝鮮出兵」（大陸侵攻）がもつ意味

はきわめて大きい。こうした関心から、本研究は「朝鮮出兵」（大陸侵攻）の全体像を究明することを目的としていた。開始当初におけ

る研究の全体構想は (1) 豊臣政権が行った「朝鮮出兵」についてこまかな実証研究を積み重ねていくと、同時に (2) この戦争がどのように記録され、近世以降どのように記憶・伝承されていったのかを検討することにあった。

(1) は「朝鮮出兵」(大陸侵攻)、それ自体を対象とする研究であり、(2) は「朝鮮出兵」(大陸侵攻) 研究史論とでも評価すべきものである。これまでも、個々の研究を従前の「朝鮮出兵」(大陸侵攻) の研究史に位置づけるという作業はなされてきてはいるが、冒頭述べたような問題意識を前提にすると、単にそれまでの研究の流れとして押さえるだけでは不十分であり、それぞれの時代背景や国内・国際事情を検討して、「朝鮮出兵」(大陸侵攻) という事実がどのように思想動員され、またどのように理解されてきたのか、周到にみていく必要がある。すなわち、「研究史論」とは、単に研究の流れを跡づけるという営為ではない。

「朝鮮出兵」(大陸侵攻) の全体像究明とは、史実そのものを徹底的に明らかにすると同時に、この戦争が後世どのように読み解かれ、社会的に語られていったのかという問題を併せ考えていこうとするものである。

2. 研究の目的

これまでの研究によって上記(1)については一定の成果をもっている。具体的な著作としては『秀吉の軍令と大陸侵攻』(2006年、吉川弘文館)、『文禄・慶長の役』(2008年、日本の戦争史 16、吉川弘文館) などである。前者は秀吉が朱印状のかたちで発する軍令を基軸に「朝鮮出兵」(大陸侵攻) の通観を試みたもの、後者は出版社が企画した通史の一本である。これらによって「朝鮮出兵」(大陸侵攻) の史実解明、史実理解は格段に前進してきている。もとより本研究においても、これらの成果を補充するかたちで調査・分析は継続するが、上記の事情を鑑み、本科研ではとりわけ (2) に主眼をおいて研究計画をたてた。

これについて換言すると、この戦争がその後の日朝(日韓)、日中関係に果たした役割、アジア史のなかでの位置づけについて考えていくこととなる。したがって、研究の重点は近世以降の日本社会における「朝鮮出兵」(大陸侵攻) の語られ方を追究することにある。具体的には近世以降に編纂された関係古文書集の編纂意図や軍記物などの編纂物のなかで「朝鮮出兵」(大陸侵攻) がどのような位置づけをあたえられているのかについて検討する。

3. 研究の方法

(1) に関しては、東京大学史料編纂所や京都大学博物館、国文学研究資料館などの史料保存機関を対象に、基礎資料の収集につとめ、後年に編纂された史料集・古文書集の編集意図をさぐる研究をすすめる。『秀吉の軍令と大陸侵攻』を執筆する過程で秀吉発給の朱印状については、一定の蓄積をもっていたので、本研究では正本以外のかたちで伝世したものについて積極的な収集をはかり、それを基に従前の「朝鮮出兵」(大陸侵攻) 理解を拡充しようと考えた。

主題となる(2)については、群書類従・続群書類従・続々群書類従・改訂史籍集覧などの資料叢書類にかなり重要な資料類が収められているので、まずこれら活字化された資料類の収集・分析をおこない。同時に国立公文書館・国立国会図書館・東京大学史料編纂所などを中心に豊臣政権・豊臣秀吉・「朝鮮出兵」などに関する未刊行資料の調査・蒐集をすすめるべく計画した。さらに、これらのうちから「豊臣秀吉譜」「朝鮮征伐記」[朝鮮太平記]「征韓偉略」「朝鮮戦談」「征韓紀略」などの基本資料に関するテキスト・クリティークを進め、これらが著述された背景や時代相、またこれらの著作が当時の社会に与えた影響などについても考察を加えていく。

また、豊臣政権下の大名として朝鮮半島に出兵した部将の家が近世にも継続している場合、個々の藩史や藩祖顕彰という文脈の中で「朝鮮出兵」(大陸侵攻) の記憶動員がなされることも多い。この点も重要な論点となるので、(1) に関わる史料収集とも関わって、可能な限り大名家の家文書・藩政史料についても調査を実施することとした。

4. 研究成果

まず、年次をおって、研究成果を整理しておく。19年度は群書類従・続群書類従・続々群書類従・改訂史籍集覧などの資料叢書から、関係史料・記事の博搜・集積を進めた。同時に国立公文書館・国立国会図書館を中心に豊臣政権・豊臣秀吉・「朝鮮出兵」などに関する未刊行資料の調査・蒐集を計った。また、豊臣秀吉発給の朱印状および「朝鮮出兵」関係の古文書を編纂した、いわゆる「古文書集」については編纂の意図等を探り、併せて収録された諸資料の真偽をただしていく作業については、国文学研究資料館所蔵の「徴古雑抄」のうち「征韓文書」を採録して、試験的な分析をおこなった。この成果は「『徴古雑抄』古文書十三(征韓文書) 所収の古文書について」として、『九州大学九州文化史研究所紀要』第51号に発表している。

翌 20 年度も国立公文書館・国立国会図書館を中心に、前年度とほぼ同様の調査を実施し、二カ年間の調査の結果、「豊臣秀吉譜」「朝鮮征伐記」「朝鮮太平記」「征韓偉略」「朝鮮戦談」「征韓紀略」などの基本資料を集積した。これを踏まえて 20 年度からはテキスト間における字句の異同分析等、具体的な史料分析に着手した。さらに史料収集の過程で、問題点の構造的な理解を深める上から、近世日本における朝鮮理解がどのようなものであったのかを、追究していく必要性を強く感じたため、当初は予定していなかった内閣文庫中の朝鮮関係の古文書に関する調査・収集を開始した。具体的には朝鮮の地理・歴史・制度にかかわる古典籍類である。「朝鮮出兵」(大陸侵攻)に関わった近世大名家の伝世史料の調査については、20 年度前田氏を対象として金沢市・加越能文庫を中心に調査を実施、島津家については国立国会図書館において「征韓録」および島津家中の覚書を収集した。また奥州伊達氏については、基本資料である「伊達治家記録」の購入し、具体的な分析を進めた。さらに、「古文書集」の分析としては前年に続いて、「水月古鑑」についてデータ化を終えたが、編纂意図等については明確な理解を得るに至らなかった。

21 年度も継続的に国立公文書館・国立国会図書館を中心に豊臣政権・豊臣秀吉・「朝鮮出兵」などに関する未刊行資料の調査・蒐集を計った。既述のように、すでに一定程度の集積をおえているので、補充的な調査となった。21 年度は収集した基本資料を対象としてテキスト・クリティークを深化させ、同時に「朝鮮出兵」(大陸侵攻)とほぼ同時代の記録にみえる言説について史料既述を整理して「取り沙汰」される「唐入り」と題する論文にまとめ、『九州大学九州文化史研究所紀要』第 53 号に発表している。ここでは、朝鮮出兵に関する風聞や噂について分析し、後世の歴史叙述に与えた影響について論じた。また「武家事紀」などで「朝鮮出兵」(大陸侵攻)の言説展開に大きな比重をもつ山鹿素行については九州大学韓国研究センター主催の公開シンポジウムで、報告をおこない、その思想的な位置づけをおこなった。ここでは日本中朝主義にたつ山鹿素行の「朝鮮出兵」(大陸侵攻)理解がその後の思潮に非常に大きな影響を与えたと結論づけており、報告内容については九州大学韓国研究センターセンター長松原孝俊編『グローバル時代の朝鮮通信史研究』に、論文として収録している。なお、同書所収の拙稿には、山鹿素行の「武家事紀」所収の豊臣秀吉発給文書を整理

してまとめている。もとより、「古文書集」研究の一環をなす成果である。ところで、耐震工事で閉鎖中であった東京大学史料編纂所が 21 年度末には再開されたので、関係資料の状況を具に実見し、22 年度調査の方針を確定させることができた。

22 年度は最終年度であり、完結に向けて研究をすすめた。幸いにも、21 年度中に「朝鮮出兵」(大陸侵攻)の学説史をまとめる機会を与えられたので、近世・近代を通じて朝鮮出兵にどのような認識が与えられたのか、概説的な整理を行った。22 年度はこれをさらに深化させ、「馭戎概言」をまとめた国学者本居宣長・「中外経緯伝草稿」の伴信友、「日本外史」の頼山陽、さらに後期水戸学の学統をとりあげ、それらの著作における「朝鮮出兵」の位置づけを分析し、その社会的影響について整理した。

以上、原則として年次をおいつつ、研究成果をまとめてきた。当初計画では主要な調査対象地と考えていた東京大学史料編纂所が研究期間中に耐震工事によって閉鎖され、研究内容や研究方法を変更せざるをえなかったものの、近世段階における「朝鮮出兵」の記憶と記録化、あるいは思想動員のかたちについては、ほぼ考究しえたものと考えている。今後は、近代以降を主対象とするかたちで研究を継続し、「朝鮮出兵」(大陸侵攻)の学説史と時々の国家戦略・外交方針、社会状況を相関的に見通す著作の完成に努めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- ①中野 等、「取り沙汰」される「唐入り」、「九州文化史研究所紀要」第 53 号、1～35 ページ、2010 年、査読無
- ②中野 等、「雑古雑抄」古文書十三(征韓文書)所収の古文書について、「九州文化史研究所紀要」第 51 号、1～37 ページ、2008 年、査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

- ①中野 等、「近世通信使外交の裏側―山鹿素行における「文禄・慶長の役」の語られ方―」辛基秀文庫開設記念ワークショップ「グローバル時代の朝鮮通信使研究」、2009 年 11 月 7 日、九州大学国際ホール、

〔図書〕(計 2 件)

- ①中野 等、「文禄・慶長の役研究の学説史検討」、『日韓歴史共同研究報告書(第 2 分

- 科会)』所収、303～318 ページ、2010 年
- ②中野 等、「山鹿素行における「文禄・慶長の役」の語られ方」松原孝俊編『グローバル時代の朝鮮通信使研究』、39～75 ページ、花書院、2010 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 等 (NAKANO HITOSHI)

九州大学・大学院比較社会文化研究院

・教授

研究者番号 1 0 3 0 1 3 5 0